

文化庁委託事業

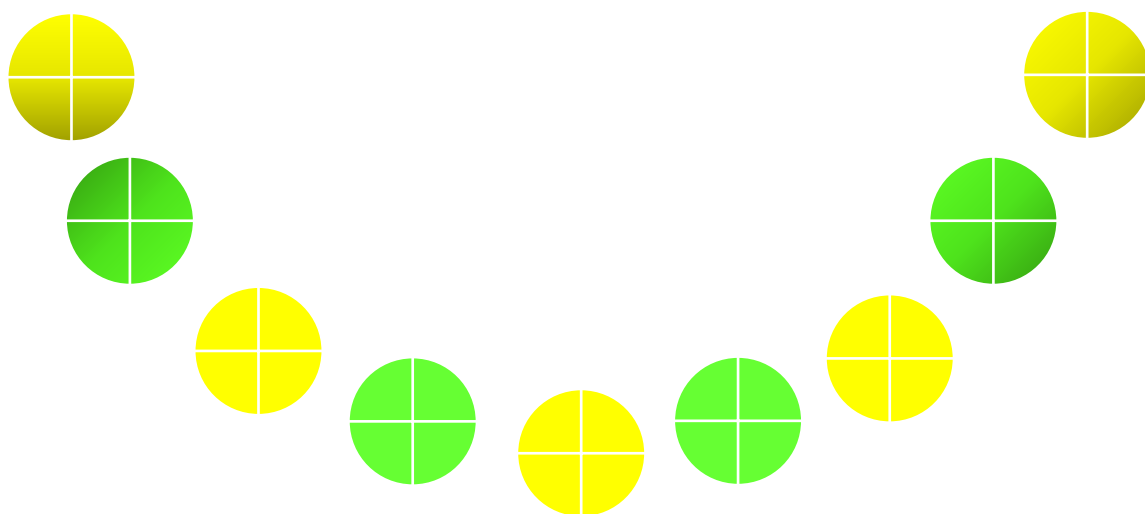
令和2年度

劇場・音楽堂等基盤整備事業

劇場・音楽堂等

スタッフ交流研修事業（国内交流研修）

実施報告書



公益社団法人全国公立文化施設協会

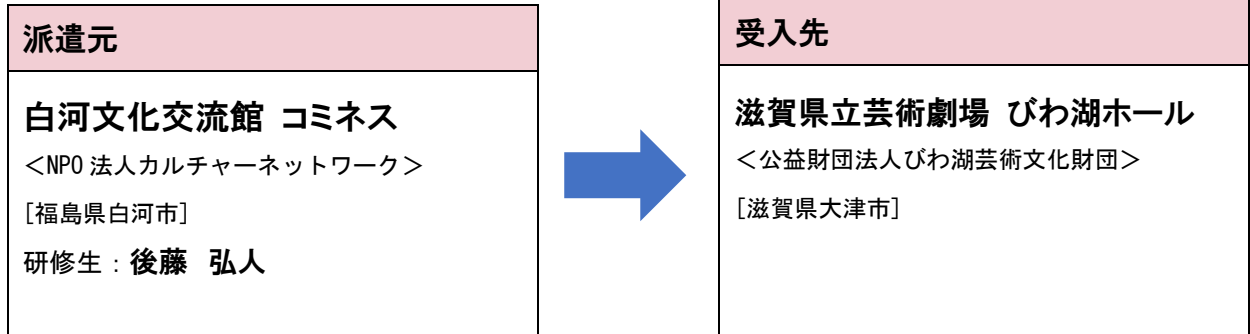
文化庁委託事業 令和2年度 劇場・音楽堂等基盤整備事業

「劇場・音楽堂等スタッフ交流研修事業」報告書

目 次

<派遣元>	白河文化交流館 コミネス	
<受入先>	滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール	3
<派遣元>	久留米シティプラザ	
<受入先>	埼玉県西部地域振興ふれあい拠点施設 川越市文化芸術振興・市民活動拠点施設（ウェスタ川越）	6
<派遣元>	宇部市渡辺翁記念会館・文化会館	
<受入先>	可児市文化創造センター	9

スタッフ交流研修事業（実務者派遣事業） 報告



研修期間

令和2年11月9日（月）～ 令和2年11月15日（日） 計7日間

研修概要

令和2年11月9日（月）～ 令和2年11月14日（土） 6日間

大ホール：S・バツハ 『マタイ受難曲』 仕込み～バラシまで

令和2年11月15日（日） 1日間

中ホール：『スタッフワーク講座』

日程・実施内容

実施日	内容
11月9日	配信：仕込み・説明 舞台：仕込み
11月10日	舞台：備品説明・バックヤード見学
11月11日	照明：仕込み・シュート見学 機材説明
11月12日	配信：カット割り確認、調整・カメラ位置調整
11月13日	ゲネプロ：ゲネプロ準備・客席で見学
11月14日	音響：仕込み内容説明・マイクチェック・バラシ
11月15日	大学連携：受付周り設営・舞台稽古見学・プレゼンテーション見学

研修生の所感

白河文化交流館コミネス 後藤 弘人

■研修の目的

普段他のホールの運営を見る機会がほとんどない中で1つの事業の一連の流れを見ることによって自分達が行っている運営方法が他のホールとどの様に違うのかを比べて見直さなければいけない部分や、参考にできる部分を見ることが出来ればと思い参加させていただきました。

またテクニカルの部分でも機構的にも大きいびわ湖ホールではどのような体制で事業を回しているのかなどを参考にして、今後の運営に活かせたらと思いました。

■研修の内容

今回は『マイ受難曲』という、場面転換等無くびわ湖ホール声楽アンサンブルと管弦楽団と地元の児童合唱団で行う2部構成の公演だった。今回初めてびわ湖ホールの方で生配信を行うという事で、通常の公演に加え配信用のカメラのアングルなどの位置関係を考えながらの仕込み、音響・照明に関しても通常のお客様とモニターに映る明かり・音声を考えながらの仕込み等通常の公演とは少し違った公演の内容だった。

また、最終日の『スタッフワーク講座』は50名近い大学生が大道具・衣装・照明などを考え何度もプレゼンをして、プロの意見も取り入れつつ1つの公演を作り上げていくという内容でその一部を見学させていただいた。

■この研修で得られた成果

今回の研修ではびわ湖ホールの1つの大きな事業を仕込みからバラシまで間近で体感することができ、各セクションの役割・本番までの流れ・進行と参考にすべきところがたくさんあった。

自館とは技術スタッフ・ホールの規模も全然違いますが根本的な部分是一緒で各セクションの役割やタイムスケジュールの組み方、ミーティングを行い意思の疎通を図るなどは自館と比較すると徹底しており、スムーズに進行していた。自館では技術スタッフも少ないこともありミーティングやタイムスケジュールの組み方に関してはその場しのぎでやっている部分も多くその為に起きるトラブルなどもあったため反省しなければいけない。

びわ湖ホールは舞台機構も多いため特に安全管理は徹底しており、常に安全第一で作業している事が印象的だった。当然の事だとはわかっているが、自館では徹底して出来ていない部分もあると思う。何かあってからでは遅いので今後は少ない人数でも今まで以上に安全管理を徹底していきたいと思う。

『スタッフワーク講座』では大学生の意見を尊重しつつもできない部分、脚本家とのイメージが違う部分はしっかりと伝え大学生もプロの意見を参考にし、その意向に沿った物を試行錯誤して作

り上げていくというのが印象的だった。

自館でも『舞台技術育成講座』というものを行って最終的にバンドの公演を行ったことがあるが改善すべき部分もたくさん有り、びわ湖ホールの『スタッフワーク講座』は大変参考になった。

■研修で得た成果をどのように活かしていくか

今回の研修では、1つの事業に多くのスタッフ・出演者が関わっており、それぞれが信頼関係を築き、関係者全員が仕事のしやすい環境作り・お客様が心地よく鑑賞できる空間作りの大切さを学ぶことができた。

舞台機構に関してはびわ湖ホールには便利な備品が多くその多くが手作りで作られていた。箱馬1つに関するアイデア1つで安全性も合理性も素晴らしいものになる物があり、その他にも色々な物があったのは印象的だった。自館でもアイデアを出し合って備品をつくる事もあるので参考にしたいと思う。

毎朝行われているミーティングは全体・各セクションの一日の作業工程を把握し報連相が徹底していて、とても分かりやすいものになっていた。自館でも見習っていこうと思う。

今後、映像や配信は舞台技術の中で音響・照明と同じく無くてはならないものになっていくと思うので少ないスタッフの中でも最低限の知識はつけておかなければいけないと思う。

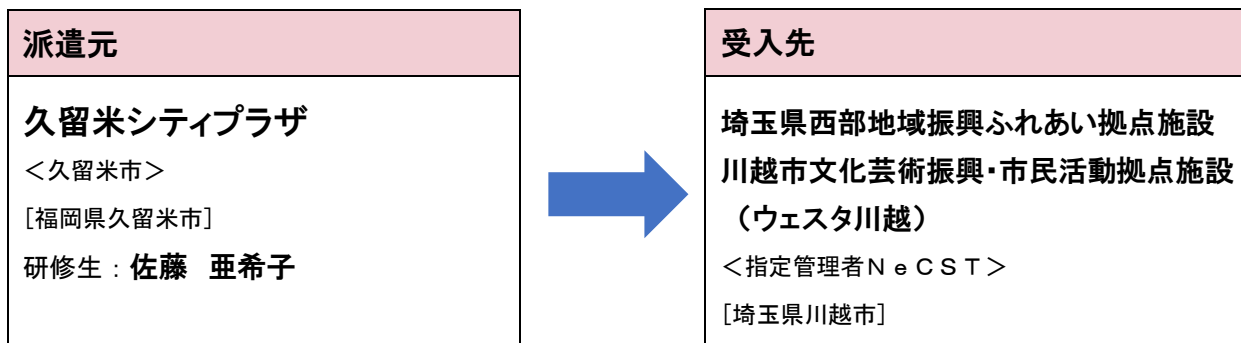
受入施設より

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 押谷 征仁

びわ湖ホールが企画制作する事業の仕込みから本番まで体験して頂きました。今回はびわ湖ホールでも初めての試みとなる「有料チケット配信」を劇場技術者が務め、「マタイの受難曲」という大作を、指揮者とミーティングを重ねながら、どのようなことを要求され、それを形にするために限られた時間の中で調整していく過程を研修していただけたと思います。

舞台芸術は「一つ一つの積み重ね」が重要で、日々の努力が活かされます。また、各種催事の醍醐味は、みんなで同じ目標に向かって努力し、結果はお客様の笑顔で報われることではないかと考えています。その過程を体験していただき、それをどのように活かして頂けるのか、今後の活躍を期待しております。

スタッフ交流研修事業（実務者派遣事業） 報告



研修期間

令和2年11月10日（火）～11月13日（金）

11月15日（日）・11月17日（火）・11月18日（水） 計7日間

研修概要

管理運営形態は異なるものの、開館時期や市の人口規模、設置目的が「文化芸術の振興、広域的な交流の促進及び賑わいの創出」という点で類似しているウエスタ川越にて、これまでの管理運営実績で培ったノウハウや現場対応などを実際に体験し、業務における課題解決を図る。

日程・実施内容

実施日	内容
11月10日	指定管理者の運営組織と体制や施設概要ガイダンスおよび館内見学
11月11日	館長会議、営業会議、責任者会議オブザーバー出席
11月12日	総合案内、予約、運営の実務研修及び情報交換
11月13日	運営、舞台スタッフの実務研修及び情報交換
11月15日	催事対応の実務研修及び情報交換
11月17日	催事対応の実務研修及び遅番研修
11月18日	運営、舞台スタッフの打ち合わせ見学、JV連絡協議会オブザーバー出席

研修生の所感

久留米シティプラザ 佐藤 亜希子

■研修の目的

私が勤務をする久留米シティプラザは2016年4月に開館し、3ホール、展示室、広場、大中小会議室、スタジオ、和室から構成される市直営の複合施設である。私はそこで貸館の業務を中心に、予約管理や現場対応、スタッフの業務割などを担当している。開館から4年が経つが、人材育成といったスタッフ管理や貸館の運用方法などの課題や問題が多くあり、その度に自分の知識やスキルが未熟なことを感じていた。そこで他の施設の運用を学ぶことで、今後の館の運営に活かすことができるのではないかと考え、スタッフ交流研修事業に参加した。

■研修の内容

今回の研修では、まず、施設見学や組織体制のお話を伺い、館長会議、営業会議、責任者会議、JV連絡協議会と様々な会議に参加した。内部の会議では、各チームの進捗や課題などを共有しながら、各チームの目標とする数字を強く意識していることが印象的だった。稼働や収益、来場者数といった数字だけを追いかけてもいけないが、現場の士気をあげる上では必要であること、その意識が自施設ではあまり高くないことを感じた。また、このような会議で各チームの動きを共有し、あらゆる課題を館全体の問題として意識づけをしている点も印象に残った。縦割り意識を変え、チーム同士互いの業務を可視化することが、ウェスタ川越のスムーズで質の高いサービスの提供につながっていると思った。

次に、貸館対応のスタッフに同行し、お話を伺いつつ貸館の転換作業や、遅番勤務、催事の打ち合わせに参加した。そこでは限られた人数で運営をするための工夫や現場での体制を学んだ。例えば、誰が見てもすぐにわかる諸室の情報をまとめた資料や利用者とのやりとりが1枚でわかるヒアリングシートを見せてもらった。資料の充実はスタッフ間での認識のズレをなくし、予約受付の対応時間やスタッフ研修の時間を短縮できるメリットがある。常々、現場対応をしながら新人へ指導をすることは難しいと感じていたが、案外小さなことから見直して、多少解決できるのかもしれないと思った。また、下見や打ち合わせの対応可能時間を固定し、長時間事務所が不在にならないような工夫、転換の時間帯にはスタッフが動けるような配置など、シフトやスケジュール管理が徹底されていた。

そしてなにより、スタッフの方々との情報交換は大変勉強になった。他館の方と現状の運用について話をし、今後の課題を共有することで、客観的に自分の職場を考えることができた。今まで自施設の課題や問題点ばかり気にしていたが、良い点を教えてもらえたことは大きな励みになった。

■この研修で得られた成果

今回の研修で得られたことは2つある。ひとつは、自施設の良い点や改善すべき点に気づけたことである。研修に参加するまでは良いところなど考えたことがなかったが、何気なくしていた業務が実はとても重要だったことを知り、「そのやり方はとてもいいですね」と言ってもらえたことは素直に嬉しく、大きな発見でもあった。逆に収益や来場者数などの数字への意識が不足していることや資料の見直しなど思ってもみなかった課題に気づくことができた。

ふたつ目は、自分自身の業務の見直しができる点である。様々な経験を積まれている各部署の方々に自分が直面していることを聞いてもらい、沢山の客観的なアドバイスをいただいた。それぞれの考え方や仕事のスタンスを知ることで、より視野を広く持って自分の業務を考えることができた。他の施設の運営方法を知るだけでなく、自分の業務を深く見直す良い機会になったと感じている。

■研修で得た成果をどのように活かしていくか

この研修で気づくことができた継続すべき良い点は、現場のモチベーションを上げるためにもスタッフ間の共通認識として持ちたいと思う。例えば、予約受付の際に行う時間をかけたヒアリングや各課との共有作業は、手間と時間はかかるが、その後の現場対応をスムーズにしている大切な業務だと改めて知った。このような業務を今後も疎かにせずに継続していく必要性を共有したい。

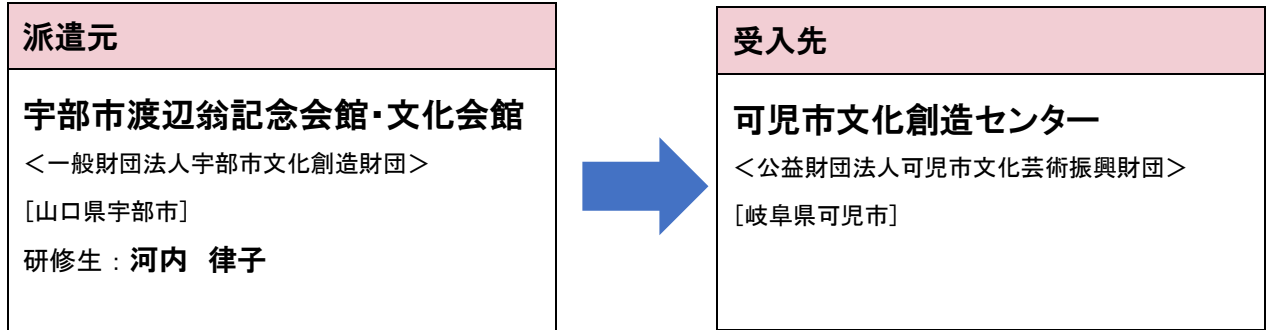
また、私が感じた今後の課題はスタッフと共有して改善を図っていきたいと考えている。具体的には個々の業務だけではなく、館全体の業務や業績を意識的に見る姿勢である。仕事への士気を上げ、利用者へのサービス向上にも繋がるのでスタッフ間で情報共有の工夫をしていきたい。加えて書類のブラッシュアップやスタッフ管理などのすぐに対応可能な現場での体制は積極的に取り入れたいと考えている。

受入施設より

埼玉県西部地域振興ふれあい拠点施設 川越市文化芸術振興・市民活動拠点施設（ウェスタ川越）
柏瀬 明彦

受講者が、自施設で抱えている問題を適切に把握した上で研修に参加したので、研修内容についてもポイントを絞って実施することができた。その結果、限られた期間ではあったが、非常に有意義な研修を実施できたと思われる。また、異なる施設の管理運営形態（直営方式と指定管理者方式）を実際に体験することで得られた、新たな気づきなどを今後の久留米シティプラザのさらなる発展のための材料としてほしい。

スタッフ交流研修事業（実務者派遣事業） 報告



研修期間

令和2年12月10日（木）～12月14日（月）・12月16日（水） 計6日間

研修概要

可児市文化創造センターの『『芸術の殿堂』ではなく、人々の様々な思いが詰まった『人間の家』でありたい』という考えの基に行われる社会包摂型の劇場経営と社会包摂事業として行われる様々なコミュニティ・プログラムを学び、現場で体験する。そして、日々の業務やチケット販売システムなどを通して、どのように「創客」を行われているのかを学ぶ。また、コロナ禍で、どのように「つながり」を継続し、創り出しているのかを学ぶ。

日程・実施内容

実施日	内容
12月10日	衛館長からの話・館内見学・顧客コミュニケーション室の活動について研修ほか
12月11日	チケットシステムについて研修・国際交流事業や多文化共生事業について研修ほか
12月12日	社会包摂としての文化芸術組織について研修・森山威男ジャズイベント参加ほか
12月13日	多文化共生プロジェクト「ママランドクリスマス会」参加ほか
12月14日	「ココロとカラダのZoom交流会」（新井英夫氏）参加・館長ゼミ参加ほか
12月16日	新井英夫氏の高齢者向けWS参加・振り返り ほか

研修生の所感

宇部市渡辺翁記念会館・文化会館 河内 律子

■研修の目的

可児市文化創造センターの社会包摂型の劇場経営としての数々のコミュニティ・プログラムを現場で学ぶことにより、今後の活動に活かしていく。また、「集いの場」としての会館のあり方や活動の進め方、チケットの販売方法や「創客」などを学び、自館に活かしていくことを目的に研修する。

本年度は特に新型コロナウイルス感染症拡大という状況の中で、どのように「集いの場」としての役割を果たされているのか、つながりの継続の工夫をどのようにされているのかを学ぶことにより、自身の活動に活かしていく。

■研修の内容

可児市文化創造センターの活動について、それぞれの事業内容や各部署の活動内容や組織、チケット販売システムや「創客」などについて座学などで学び、実際に「みんなのピアノ」事業の現場や可児市文化創造センターの応援団体である「NPO 法人 ala クルーズ」の活動についての会議参加、多文化共生プログラムのクリスマス会への参加、問題を抱えた子ども達向けのココロとカラダのワークショップ・高齢者向けのココロとカラダのワークショップを Zoom 参加と現場参加で学びました。館長ゼミにも参加させていただき、劇場経営、劇場の役割やミッションなどについて、課題となる本と館長の話を基に討論される内容を学ぶことも出来ました。

■この研修で得られた成果

この研修を通じて、可児市文化創造センターの職員の皆さんが、劇場経営について同じ目的に向かって進んでいるということに驚きました。劇場の役割を果たすために、一人一人が経営者のように業務の推進をされているように思えました。どの事業を見ても目的が明確で、事業は目的を果たすための手段となり、結果を生み出しているように思えました。可児市文化創造センターの掲げる「『芸術の殿堂』ではなく、人々の思いの詰まった『人間の家』でありたい」という考えを誰もが共有し、それに向かっていくことに感銘を受けました。経験させていただいた事業の一つ一つも勉強になりましたが、まず、この目的の明確化により、それぞれが仕事をする意味を考え、あきらめずにやり続けることの重要性を深く感じました。

■研修で得た成果をどのように活かしていくか

私が、今回の研修を通じて学び、まず取り組むべきことは、事業推進する上での目的の明確化と「依存する」つながりを多く持つことだと思っています。自館も社会包摂を念頭に公立の文化施設に求められている「地域に開かれ、人々が集い、豊かに交流できる『新しい広場』としての機能」

を果たすべく、進んで行きたいと思っています。また、地域の中で自館の置かれている状況を鑑み、会館の役割を考え、目標を決めて、そのための事業推進の計画を立て、明確に表明することから始めたいと思います。私は、今回、衛館長の言葉から、これを具現化するには「依存できる」人づくりと「依存できる」つながりを広げていくことが必要だと学びました。そのためにも、この研修で得たことを自館で共有し、目標を共通のものとしていき「依存できる」人づくりをした上で、「依存できる」つながりを広げていきたいと思っています。そして、可児市文化創造センターで実施されていた事業を参考に宇部市に必要な事業企画にしていきたいと思っています。また、企画し、実施するだけで終わることのないように振り返りや結果に対しての検証を必ず行い、根気強くあきらめずに成果に結び付けていきたいと思っています。

受入施設より

可児市文化創造センター 坂崎 裕二

事前にアーラのミッションや事業内容を調べるなど予習をされたうえで参加いただいたことで、より深く意見交換したり事業を体験していただくことができた。

「地域課題と向き合い、文化芸術で何ができるか」という視点から社会包摂型のコミュニティ・プログラムにいくつか参加いただきましたが、積極的に関わっていただいたので、事業のもつ意味やその効果を体感していただけたのではないかと思います。

コミュニティ・プログラムを推進し、その事業効果（アウトカム）を出すことは簡単ではありませんが、今回の研修が少しでも参考になれば幸いです。